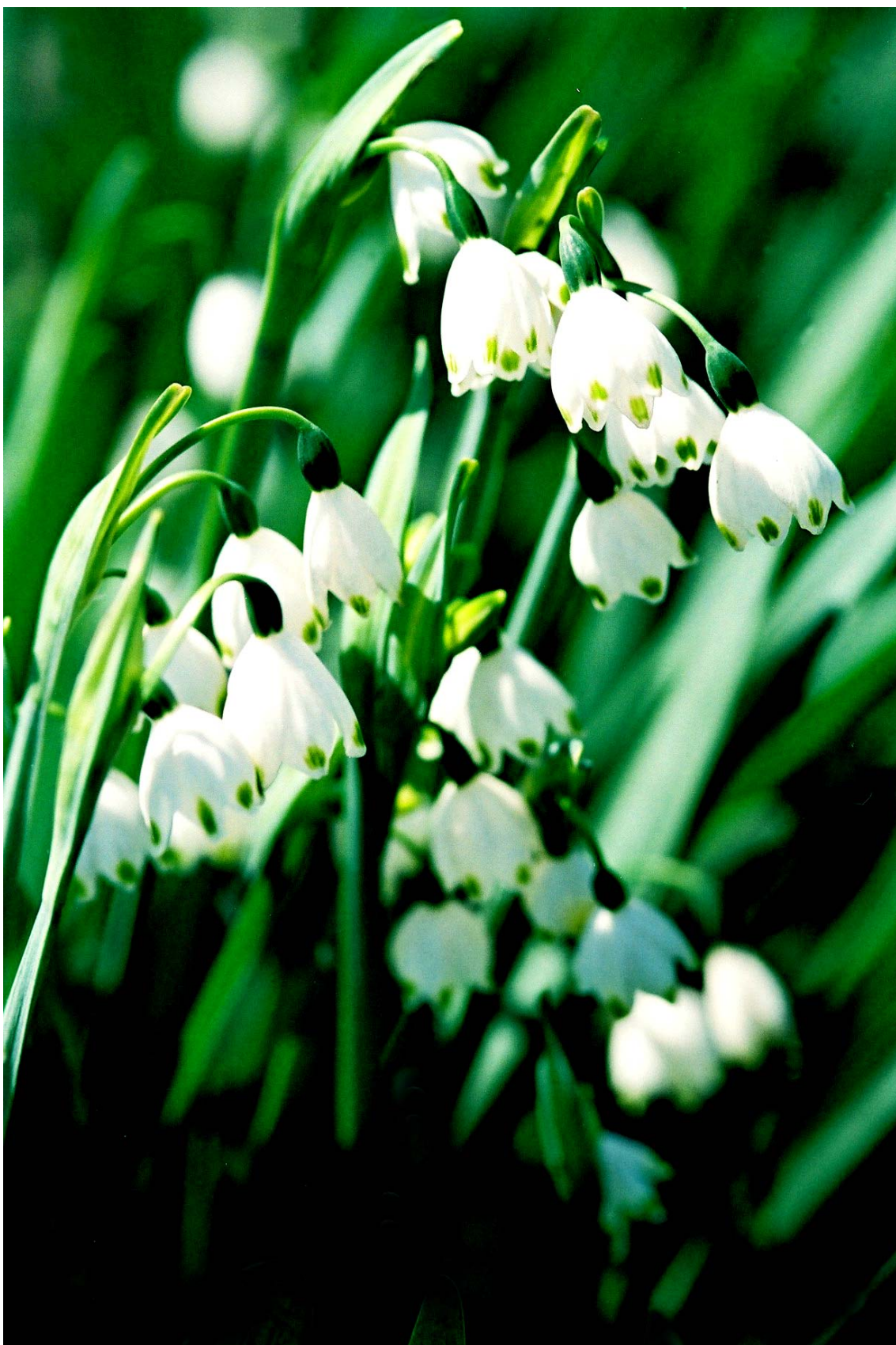


7) スノー・フレーク

スノー・フレークはヒガンバナ科の多年草で、花が鈴蘭に、葉は水仙によく似ているところから、スズランスイセンともいわれ、球根の形も水仙によく似ており、球根だけではなかなか両種の区別はできない。またスノー・ドロップが松雪草とか待雪草などといわれ、草丈が 20cm ぐらいであるのに対して、こちらの方は 30cm～40cm ぐらいになり、少し大きめであるために『大松雪草』ともいわれている。原産地は中部ヨーロッパから地中海沿岸地方で 9 種類が知られている。英語では『snow flake』で、これは雪片という意味である。この種の特徴は日陰でも陽なたでもよく育ち、まったく手がかからないことであろう。4 月ごろ鈴蘭に似た白い花を咲かせるが、この花は 6 枚の花弁それぞれの縁に、緑色の斑点を持ち、鈴蘭に比べるとずっとペチコートに近い形の花を咲かせる。このスノー・フレークの白い花がいっせいに咲き揃うと、まるで小さな白いチョウチョがたくさん集まっているみたいで、スノー・ドロップ同様なんとも幻想的である。しかし花のわりに葉の量は多く、特に初夏の頃になると一段と大きくなる。日本水仙のように葉そのものが長く伸びることはないので、大きな場所を取るほどではない。

イギリスでは『summer snow flake』(サマー・スノー・フレーク)といわれる品種も栽培されている。地中海沿岸地方と異なり、春が遅く花のあまり多くないイギリスでは、この花のように寒冷地でも良く育つものは、園芸品として受け入れる風土が備わっているのだろう。こちらの方はオーストリアから南ヨーロッパが原産で、5～6 月頃花を咲かせて草丈は 30cm ほどになる。この種にはグレビティ・ジャイアントという品種もあって、日本でも良く栽培されている。また秋咲きの『autumn snow flake』(オータム・スノー・フレーク)はポルトガル、モロッコの前産で、春植えて秋咲きの小型種である。秋に咲く球根の花は意外に少なく、また家庭で育てるにはあまり大きなスペースをとらず、可憐でちょうどよいだろう。この種はそんな控えめなところがとりえなのである。

どの品種も殖やすには 2～3 年に一度ぐらい、分球を繰り返せばよく、ほとんど肥料を与えなくても毎年たくさん花を咲かせてくれる。決して派手な花ではないが、むしろそこがこの花のいいところで、ちょっとした空き地や法面などにさりげなく植えておくと、疎林の中などでも少しずつ殖えてくれる。酸性土よりも弱アルカリ性の土を好むので、できれば毎年、石灰などを撒いてあげるとさらによい。肥料は油粕などのほか、適度にリン酸分の多い、骨粉や魚粕などを与えるようにする。化成肥料を適宜与えるだけでもよいだろう。病害虫には比較的強いものの、ついでがあれば花が終わった頃に、殺菌剤の溶液で消毒すると、いっそう成績がよくなる。何とんでもこれらの品種は雑草にも負けないところがとりえで、庭の片隅や斜面など少々空き地があったら、ぜひ植えておくことをお勧めしたい。



スノーフレークの花、スイセンによく似ている(埼玉県深谷市)。



こんな風に木の根元を取り巻くように植えてあげると、庭に立体感が出てきて、全体が引き締まって見えてくる(茨城県結城市財団法人日本花の会結城農場)。



近くで見るとこんな表情をした花である(埼玉県深谷市)。

[目次に戻る](#)